

音放出動詞結果構文における経路句について

林 高宣*

Takanori HAYASHI
On the Sound-Emission Path Resultative

【キーワード：音放出動詞，経路句，事態認知の推移】

1. はじめに

動詞補部構造を決定するのは構文であるとする立場（Goldberg and Jackendoff 2004）に対し，補部構造が動詞によって決定されるとする，生成文法や機能的伝統主義（Langacker 2005）といった立場がある。湯本（2011）は，前者を動詞最小主義，後者を動詞最大主義と呼んでいる。そして，自らは Langacker（2009）による“skewing”という概念を援用して両者の中間的立場をとり，“skewing”の過程をメトニミーから説明している。

本稿では，音放出動詞の経路句を付加詞であると主張する安原（2013）に対し，音放出動詞結果構文の経路句は補部であり，その他の経路句は一義的に補部，付加詞であるわけではなく，Langacker や湯本が主張する“skewing”，すなわち事態認知の推移から説明されることを明らかにしたい。

2. 音放出動詞

音放出動詞（verbs of sound emission）には，主語の内在的能力によって発生する音を表す動詞と主語の移動に伴って発生する音を表す動詞が存在することが知られている。まず，これらの音放出動詞の特徴について見ていきたい。

2.1. 外的原因文

音放出動詞には，主語の内在的能力によって発生する音を表す（1）の場合と，物体が経路に沿って移動する際に放出される音を表す（2）の場合があることはこれまでにも指摘されてきた（Lupsa 2003, 影山2006, Folli and Harley 2008, Yasuhara 2012）。

(1) a. A bus hissed as it sped by on splashing tires.
(影山 2006: 58)

b. The train whistled.
(Folli and Harley 2008: 192)

c. I'm so hungry that my stomach's rumbling.
(Lupsa 2003: 42)

(2) a. Above him, water hissed through the valve
as the ball-cock closed. (影山 2006: 58)

b. The bullet whistled out of the room.

(Folli and Harley 2008: 192)

c. Tanks were rumbling through the streets.

(Lupsa 2003: 42)

(1) では単に主語が音を放出する事態が述べられているが，(2) では音を放出しながら経路に沿って移動していることが述べられている。安原（2013）によれば，(1) では音発生の原因が主語に内在しており，(2) では主語が経路を移動することに音発生の原因がある。安原は前者を「内的原因文」，後者を「外的原因文」と呼んでいる。

さらに，内的原因文では（3）のように音放出動詞と経路句は共起することができない。

(3) a. *The car honked down the road.

b. *The dog barked out of the room.

c. *Bill whistled past the house.

(安原 2013: 20)

これは Folli and Harley（2008）でも指摘されている。

(4) a. *John yelled into the room.

b. *Mary laughed out of the room.

(Folli and Harley 2008: 192)

(4) において移動が「叫ぶ」「笑う」という事態を生じさせることができないため，Folli and Harley はこれらの動詞が移動様態動詞（manner-of-motion verb）としては用いられないと述べている。

影山（2006）では，このような音放出動詞の示す現象に対して，さらに一歩踏み込んだ指摘がなされている。(5a) (5b) には前置詞句 into the bay, into the phone がそれぞれ含まれているが，文中における両者の役割は全く異なっている。

(5) a. When a mighty blast shrieked into the bay, ...

b. In the middle of the conversation he almost
shrieked into the phone. (影山 2006: 59)

これは (6a) (6b) でも同様である。

(6) a. Avalanches roared down the mountains of
northern Afghanistan.

b. He roared down the passage, “Louisa,
LOUISA...” (Ibid.)

影山によれば，(5b) (6b) における経路句 into the phone,

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

down the passage は主語が言葉を発する目標を表しており、これらは単なる付加詞であるため省略しても差し支えない。これに対し、(5a) (6a) における経路句 into the bay, down the mountains of northern Afghanistan は主語が音を発しながら移動する経路を表す不可欠の要素である。影山は、これらを語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure; LCS) における MOVE の補部であると述べている。

以上のように音放出動詞と共に起る経路句に関して、影山は付加詞とみなされる場合と不可欠の要素である場合があることを指摘している。

2.2. 非能格性と非対格性

さらに、音放出動詞は非能格動詞か、あるいは非体格動詞かという問題についてもふれておきたい。

Levin and Rappaport Hovav (1995) によれば、ほとんどの非能格動詞がとる単一項は動作主的 (agentive) である。一方、多くの非対格動詞の単一項は状態変化を被る。放出動詞 (verbs of emission) がとる単一項は動作主的ではなく、状態変化を被ることもないため、どちらに分類されるのか一見したところでは分かりにくい。

しかし、Levin and Rappaport Hovav は非能格動詞が結果構文や way 構文で見られることを理由に、放出動詞を非能格動詞とみなしている。

- (7) a. The phone rang me out of a dreamless oblivion at seven-fifteen.

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 138)

- b. Each morning the train groans and creaks its way out of the 20th century into a world that differs little from what Ottoman passengers saw from their carriages a century ago.

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 138-139)

(7a) では音放出動詞が結果構文に見られ、(7b) では way 構文で見られる。

さらに、英語では接尾辞 -er を伴う派生名詞が一般的に非能格動詞から形成される点についても指摘している (Levin and Rappaport Hovav 1995: 139)。

- (8) beeper, buzzer, clicker, ringer, squeaker...

結果的に放出動詞は非能格動詞として分類されており、その下位分類である音放出動詞も非能格動詞と分類されることになる。¹⁾

このような主張に対し、影山 (2006) は不随意的な音放出動詞が非対格動詞であることを支持するテストとして there 構文への生起をあげている。虚辞 there の出現が可能となるのは外項位置が空になっているからであり、これらの動詞が there 構文に生起可能であれば、それらは非対格動詞であることになる。影山は、(9) のように経路句を伴わない音放出動詞も (10) のように経路句を伴うものも there 構文への生起が可能であることを指摘している。

- (9) a. He bade me to put my hand into the cup

with his, while in my purse there jingled the coins which bought his blood.

- b. Beginning at 1:00 a.m. in the chill wet blackness of the night of September 12,... there roared the greatest artillery fire that American arms had ever known.

(影山 2006: 61)

- (10) a. ...when into the barnyard there roared a fancy new car.

- b. Through the crowded street there clattered a little white donkey. (影山 2006: 62)

以上から影山は、移動を表すか否かにかかわらず、不随意的な音放出動詞は非対格であると述べている。²⁾

さらに影山は動詞 shriek の語彙概念構造を2通り仮定し、随意的な発話動詞である非能格動詞と不随意的な音放出動詞としての非対格動詞は異なるものであると説明する。

- (11) a. 随意的な発声動詞ないし発話様態動詞としての shriek (非能格)

x ACT (ON y)

|

UTTER "SHRIEK"

- b. 不随意的な音放出動詞としての shriek (非対格)

BECOME [[SHRIEK] BE NOT-AT-x] (Ibid.)

影山によれば、(11a) は人間などを主語にとる随意的な発話様態動詞の語彙概念構造であり、動作主 x が行為 UTTER "SHRIEK" を自ら行うことを表している。(ON y) は任意の項である。随意的な発話動詞は発話内容を人に伝えることを目的とするため、(12) のように発話内容が直接引用句によって表され、前置詞句によって発話相手が示されることがある。

- (12) "It's him!" he shrieked to the others. (Ibid.)

一方、(11b) の語彙概念構造は「shriek という音が x から発生する」という事態を表しおり、擬人化の場合を除いて (13) を単なる音の発生とは解釈できない (影山 2006: 62)。

- (13) #Suddenly, the engine shrieked to me and then stopped. (影山 2006: 63)

このように同じ動詞 shriek であっても、人間や生物を主語とする随意的な発声動詞・発話様態動詞は外項を主語にとって非能格であり、不随意的な音放出動詞は内項を主語にとって非対格であると説明される。音放出動詞を含めた放出動詞全体を非能格動詞とする Levin and Rappaport Hovav の分析に対し、影山の分析は随意的な場合と不随意的な場合を明確に区別している。

3. 結果構文における音放出動詞の認知メカニズム

音放出動詞を含む外的原因文は、最終的に経路句によって示される結果に至ったことを表す結果構文と分類される。これには影山 (2006) によって指摘された (5b) (6b) (9) は含まれない。安原 (2013) は、音放出動詞結

果構文に生起する経路句を移動の原因・手段を表す付加詞であると仮定することにより経路句全体が統一的に説明できると述べている。経路句が付加詞であるか否かについては後に考察するが、なぜ音放出動詞結果構文の経路句が移動の原因・手段と解釈されるのかという点について安原は明確には説明していない。ここでは、結果構文における音放出動詞の認知メカニズムについて考えてみたい。

3.1. 安原 (2013)

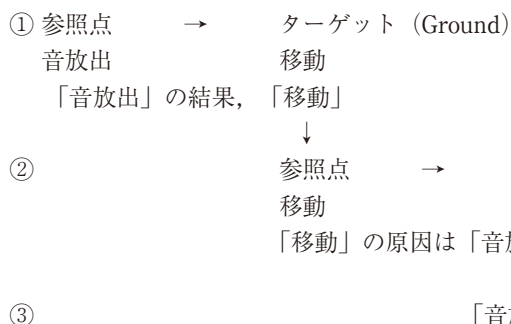
安原 (2013) は、音放出動詞 *whistle*, *rumble* と共起する経路句に対して事象依存分析を提示している。通常、状態変化を表す表現と位置変化を表す表現は同一文中に共起することができない (Goldberg 1991)。³⁾ しかし、Yasuhara (2012) は、状態変化と位置変化の両方を表す表現が共起する次のような例を示し、これらが適格である理由は、位置変化を表す表現が原因事象 (causing event) を、状態変化を表す表現が結果事象 (result event) をそれぞれ担っているからであると説明している。

- (14) a. John broke the vase into pieces onto the floor.
b. John squeezed the rubber ball out of shape into the jar. (安原 2013: 22)

*Sam kicked Bill black and blue out of the room. においては、状態変化を表す表現 *black and blue* も位置変化を表す表現 *out of the room* もともに結果事象を担っているのに対し、(14) ではそれぞれの表現が担う事象が異なっている。つまり、(14) では1つの出来事が1つの事象を担うという自然な状態が成立していると安原は述べている。

以上のように安原は経路句が原因・手段として用いられる場合があることを指摘し、経路句がこのような機能を果たす場合に限って音放出動詞と共起可能であると主

(15) 結果構文における音放出動詞の認知メカニズム



張している。音を発生させる原因が主語に内在している内的原因文 (1) は、それ自体で原因事象を担っている。そのため、内的原因文に経路句を加えることは、1つの結果に対して2つの原因を仮定することになり、(3) は容認不可能となる。

3.2. メトニミー

湯本 (2011) は、音放出動詞の経路句が移動の原因・手段と解釈されることをメトニミーという概念を用いて

説明している。湯本 (2011: 45) によれば、結果構文を支えている認知的メカニズムは2つの事象の間に原因と結果を見出そうとする人間の解釈 (construal) である。音放出動詞結果構文の場合、主語が音を放出することによって結果的に移動したことを表すため、音の放出が移動の原因であるという解釈が成り立つ。

我々人間の認知的メカニズムの1つに、直接ターゲットへ意識を向けるのではなく際立ちの高い参照点へ意識を向け、そこから最終的にターゲットへと意識を向けるという参照点構造がある (Langacker 1993)。例えば、「一晩で一升瓶を飲み干した」という発話において「一升瓶」は「日本酒」というターゲットへ意識を向けるための際立ちの高い参照点として機能している。そして、この参照点から近接性に基づく比喻、すなわちメトニミーによってターゲットへと意識を向けることになる。

但し、音放出動詞結果構文の認知メカニズムの最終段階はメトニミーではなく、メタファーによって説明されるべきであろう。湯本 (2011: 46-47) では「結果構文における音放出動詞のメトニミーのメカニズム」として提案されているが、ここでは部分的に修正を加えて「結果構文における音放出動詞の認知メカニズム」として提示する。

湯本によれば、The trolley rumbled through the tunnel. において音放出動詞が選択されている理由は、音放出動詞によって表される擬音が認知主体にとって際立ちを持った参照点となっているためである。これは移動を表す動詞 *went*, *moved* が用いられていないことから明らかである。以上のことが (15) の①の段階で示されている。音を放出しない場合、結果として移動は生じないことから、①では音の放出が移動の原因であると推論され、ターゲットとしての移動へ認知的接触がなされる。②では移動することによって音が放出されることから移動が参照点となり、結果である音放出がターゲットになってい

る。湯本によれば、③の段階では原因である音放出が参照点となり、移動が結果的にターゲットになる。湯本はこの音放出が移動と時間的に一致していることを理由として参照点とターゲットが一致すると「結果構文における音放出動詞のメトニミーのメカニズム」において説明している。但し、ここでは「音放出は移動である」というメタファーを用いる方が適切であると考えられる。

4. 事態認知の推移

この節では、文中における経路句の働きについて考えるため、事態認知の推移という考え方について述べる。そこには、湯本が動詞最小主義と呼ぶ Goldberg and Jackendoff (2004) の主張とそれに対立する立場の中間に位置する自然で整合性のとれた立脚地が見えてくる。

4.1. 動詞最小主義

Goldberg and Jackendoff (2004) は、すべての結果構文を家族的類似性を有するネットワークとして構文文法の枠組みから整理している。つまり、レキシコンと文法の間に明確な境界は存在せず、結果構文の特徴を示すすべての文は構文の統語論と意味論によって形成されると仮定する。結果的に、音放出動詞 *rumble* は「ゴロゴロ音を出す」という意味のみを有し、この動詞を含む (16a) が表す移動の意味は結果構文によって与えられることになる。

- (16) a. The trolley rumbled through the tunnel.
b. The wagon creaked down the road.
c. The bullets whistled past the house.

(Goldberg and Jackendoff 2004: 540)

(16b) (16c) においても同様である。このように動詞に一義のみを認め、多様な意味は構文から与えられるとする立場を、湯本 (2011) は動詞最小主義と呼んでいる。

まず、動詞最小主義に対する湯本 (2011: 35-40) の反論を見てみよう。湯本は Goldberg and Jackendoff (2004) によって提唱された論理的枠組みに対して以下のような異議を唱えている。

Goldberg and Jackendoff による結果構文の統語論、意味論は次のように示される。

- (17) Syntax : NP₁ V NP₂ AP₃
Willy watered the plants flat.
Semantics : WILLY CAUSE [PLANTS BECOME FLAT]
X₁ CAUSE [Y₂ BECOME Z₃] ← Constructional subevent
Agent Patient Predicate
MEANS : WILLY WATER PLANTS ← Verbal subevent
Agent Patient

(湯本 2011: 31-32)

さらに、(16) の音放出動詞結果構文の統語論、意味論は次のように仮定されている。

- (18) Sound-emission path resultative
Syntax : NP₁ V PP₂
Semantics : X₁ GO Path₂
RESULT : [verbal subevent: X₁ emit sound]

意味論は構文下位イベントと動詞下位イベントからなるが、意味的結束性の原則 (Principle of Semantic Coherence) によって両方における Agent, Patient が同じ働きを担う必要がある。

(19) Principle of Semantic Coherence

Roles of the construction (rC) and roles of the verb (rV) may unify only if they are semantically compatible; roles rV and rC are

semantically compatible if and only if rV can be construed as an instance of rC.

(Goldberg and Jackendoff 2004: 550)

同じ働きを担う項が完全な項実現 (Full Argument Realization) によって統語論に実現され、結果構文が形成される。

(18) の音放出動詞においても、構文下位イベントと動詞下位イベントにおける主語はともに Agent と仮定されており、意味的結束性の原則の前半部分では問題を生じない。⁴⁾

しかし、湯本は後半部分に問題点を指摘する。動詞役割が構文役割の一例と解釈されなければならないとすれば、音放出を移動の一例としなければならないからである。実際には、音放出が移動の一例になる可能性はない。

さらに、音放出動詞結果構文と消滅動詞結果構文に構文下位イベント result と動詞下位イベント RESULT を採用することは、「結果」を二重に与えることになり、余剰であると指摘している。

これらの指摘は Goldberg and Jackendoff の論理的枠組みの不備についてはいるかもしれないが、直接的に動詞最小主義を否定する主張とは言えない。但し、湯本による第2の指摘に関連しては音放出動詞に関する興味深い観察が見られる。Goldberg and Jackendoff が音放出動詞結果構文の動詞下位イベントを RESULT とする根拠は以下の3点である。

まず、(16) では動詞下位イベントによって構文下位イベントが達成できないことがあげられる。(17) では「水をまく」という動詞下位イベントが「平らになることを引き起こす」という構文下位イベントを実現する手段となっているが、(16) において動詞下位イベントは「手段」

ではなく、「結果」と考えられる。音の放出が移動と同時に発生する場合には way 構文が用いられなければな

(Goldberg and Jackendoff 2004: 541)

らないからである。

- (20) a. The car honked its way down the road.
b. The dog barked its way out of the room.
c. Bill whistled his way past the house.

(Goldberg and Jackendoff 2004: 541)

湯本は (16) のような音放出移動動詞と移動を伴わない音放出動詞は別次元で考えられるべきであると述べ、Levin and Pappaport Hovav (1991) の例を引用して音放

出動詞結果構文と音放出の原因が主語自体に内在する内的原因文との違いにふれている。

- (21) a. The beautiful new Mercedes purred along the autobahn.
b. *The cat purred down the street.

(Levin and Pappaport Hovav 1991: 138)

(21a) では音の放出が移動に付随して生じるのに対し、(21b) では音が出る原因が猫自体にあり、音の放出は猫の移動に付随するものではない。このように音放出移動動詞が表す音は結果というより移動に付随して発生すると考えられる。

Goldberg and Jackendoff が音放出動詞結果構文の動詞下位イベントをRESULTとする第2の根拠は、次の例で結果の解釈が成り立つからである。

- (22) The door banged open.

(Goldberg and Jackendoff 2004: 546)

(22) では、「ばたん」という音がドアの開いた結果と解釈できる。しかし、これに対しても湯本は、(23) における動詞 creak, rumble が副詞 slowly と共起できるため、移動経路の中間を焦点化していることを理由に、動詞によってどの部分を焦点化するかが異なっているに過ぎないと述べている。

- (23) The gate slowly creaked/rumbled shut.

(Rappaport Hovav and Levin 2001: 776)

この点に関しては、音放出動詞結果構文には動詞イベントを結果と考えてよいタイプとそうでないタイプがあると仮定することができるかもしれない。

第3の根拠は、(24) においてエレベーターが音を出しながら下まで降りていったという解釈が不可能なことである。

- (24) *The elevator creaked itself to the ground.

(Goldberg and Jackendoff 2004: 547)

音放出動詞結果構文には自動詞が用いられ、同じ動詞を他動詞として用いるためには見せかけの再帰代名詞をとらなければならない。しかし、音を手段として降りていくという事態は Goldberg and Jackendoff の言う百科事典的知識と一致せず、音を手段と理解できないため、発生音は結果とみなされる。発生音を手段とみなせない理由について Goldberg and Jackendoff はエレベーターを有生物とみなすメタファーが存在しないからであると述べている。⁵⁾

これらの湯本による指摘は動詞最小主義を直接に否定するものではないが、音放出動詞結果構文に関する興味深い観察であると言える。

4.2. 動詞最大主義

安原 (2013) は、Levin and Rappaport Hovav (1995) による音放出動詞の分析を多義性分析と呼び、音放出動詞と経路句の共起可能性は動詞が移動の意味を持つ場合に可能であり、そうでない場合には不可能であると述べている。動詞 whistle が移動の意味を持てば (25a) のように経路句と共起可能であり、移動の意味を持たない場

合、(25b) のように共起不可能となる。

- (25) a. The bullet whistled through the window.

(Folli and Harley 2005: 115)

- b. *Bill whistled past the house. (= (3c))

安原によれば、動詞の多義性を仮定する分析では用法によってレキシコンに動詞の意味を記載する必要が生じ、レキシコンの複雑化につながる。つまり、Levin and Rappaport Hovav の主張は動詞最大主義であり、安原の主張は対極にある動詞最小主義ということになるのかもしれない。

さらに、安原 (2013: 33) は音放出動詞に多義性を仮定する必要がない理由について述べている。音放出動詞が多義的に移動の意味を持つとすれば、移動距離を表す表現との共起や移動距離を尋ねる疑問文に現れることが可能になるはずであるが、実際にはそれは不可能である。

- (26) a. ??The bullet whistled two hundred meters.

(安原 2013: 33)

- b. *How far did the bullet whistle?

(Folli and Harley 2006: 144)

しかし、(26) が容認不可能である理由を動詞 whistle が多義的に移動の意味を持たないことに求めるべきではないのかもしれない。弾丸が音をたてながら空中を移動するという状況を想像することや、その際に移動と移動経路が結びつけられることは不自然ではない。つまり、動詞 whistle が表す「音をたてながら移動する」という概念とその移動経路は我々の認知活動の中で結びつきやすいと考えられる。これに対し、音放出動詞が移動距離を表す表現と共起できないことや移動距離を尋ねる疑問文に現れることができないという事実は、音をたてながら移動するということとその移動距離を結びつけるという概念化が我々の認知作用の中に定着していない点に求められるべきであろう。すなわち、Goldberg and Jackendoff の言う百科事典的知識と一致しないことに求められるべきである。

4.3. Langacker (2009)

以上のような動詞最小主義と動詞最大主義に対し、Langacker (2009: 250) は、動詞最小主義が語彙の最大多義性 (maximal polysemy) に対する適切な反論であることを認めつつ、最小多義性 (minimal polysemy) も受け入れがたいとし、自らはその中間的立場をとる。

例えば、動詞 kick は次のすべての構文に現れることが可能である。

- (27) a. Pat kicked the wall.

- b. Pat kicked Bob black and blue.

- c. Pat kicked the football into the stadium.

- d. Pat kicked at the football.

- e. Pat kicked his foot against the chair.

- f. Pat kicked Bob the football.

- g. The horse kicks.

- h. Pat kicked his way out of the operating room. (Langacker 2009: 250-251)

動詞最大主義の立場からすれば、動詞 *kick* はプロフィール、ランドマークの選択、補部 *black and blue, into the stadium* から8つの意味を持つことになる。対照的に動詞最小主義の立場からは、動詞 *kick* は1つの意味を有し、多義性は構文によって与えられることになる。

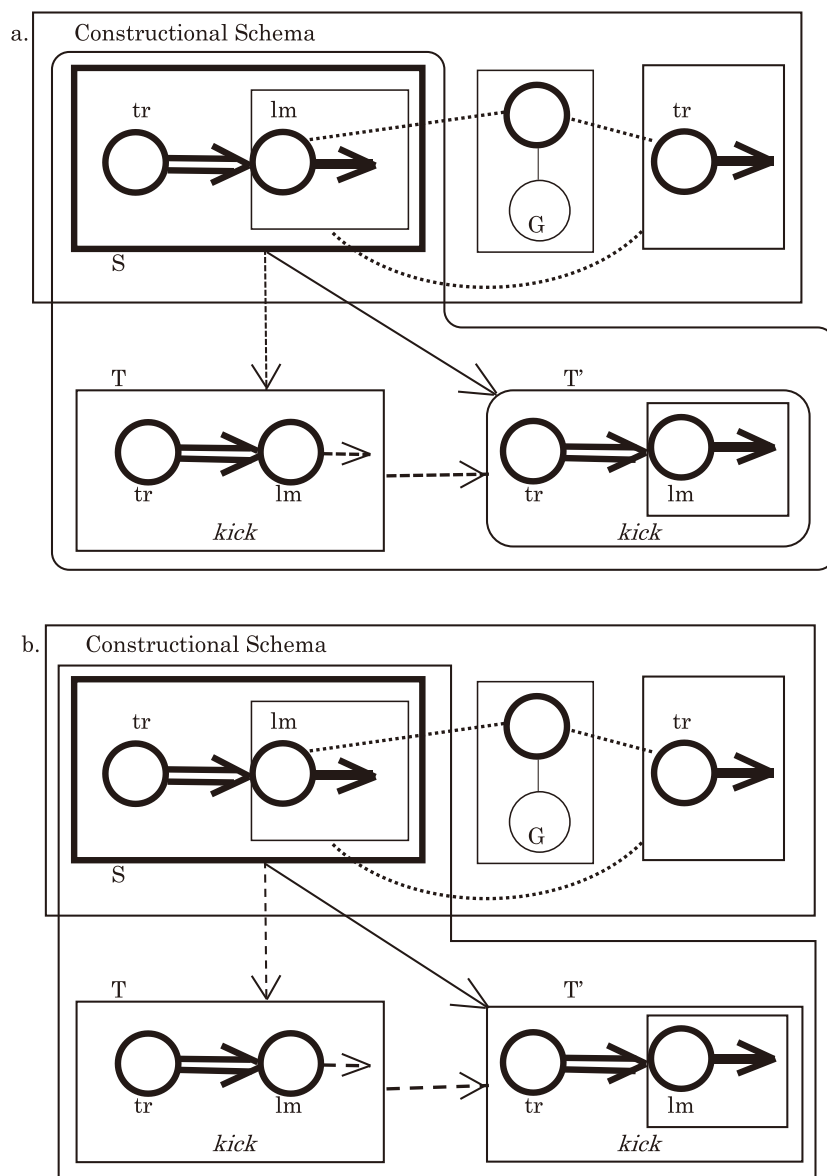
Langacker は自らの立場が動詞最小主義と動詞最大主義の中間のどこかにあるとしている。⁶⁾ Langacker による中間的立場は次のように説明される。Langacker は議論の展開上、動詞 *kick* の基本的な意味を (27a) の他動詞であると仮定している。この他動詞用法は (28a) における左下の図によって表される。(28a) において右下の図に示されている動詞 *kick* の使役移動用法は動詞 *kick* の他動詞用法の意味と一致していない。標準的事態として提示される左上の図の1つの具体例が左下の図であるが、そこでは2重線矢印で示されたトラジェクター *Pat* からランドマーク *the wall* への力の伝達がプロフィールされるだけである。ランドマークからの破線矢印は、加

(28) Induction of a new lexical sense

えられた力によってランドマークが移動する可能性を表している。蹴られた物の移動は、何かを蹴るというシナリオの一部だからである。しかし、それは動詞によってプロフィールされるものではないし、必ずしも想起 (evoke) されるものでもない。

つまり、(28a) の左下の図はランドマークの移動をプロフィールしておらず、移動も想起されないため、使役移動構文の仕様を十分には満たしていない。(28a) の右下の図において示されているのは、使役移動構文の動詞の部分に *kick* が入る可能性があることだけである。

しかし、本来は他動詞の意味に基づいていた動詞 *kick* の使役移動用法が繰り返されることになれば、(28a) は (28b) として慣習化され、確立したものとなる。Langacker (2009: 52) によれば、(28a) における右上の図を除いた3つの図を囲む角の丸い枠は確立した言語単位となっていないもの、すなわちスキーマとなっていない構造を表している (左下にある動詞 *kick* の他動詞



(Langacker 2009: 252)

用法はスキーマとなっている)。一方, (28b) では3つの図が角のある枠で囲まれており, これらが確立した言語単位としてのスキーマであることを示している。この時点で動詞 *kick* は使役移動の意味を持つことになる。ここには蹴ることが使役移動を記号化する慣習的単位 (T') が存在している。

このようにすべての拡張される意味は基本的な意味との関係において文脈の中で決定される。動詞 *kick* が多義性を持つとすれば, それは (28b) においてである。当初は (28a) におけるように基本的な意味を介して動詞 *kick* の使役移動の意味が利用されているが, それが1つの単位として確立されると, (28b) のように動詞 *kick* は直接に使役移動として利用されることになる。Langacker によれば, 結果的に分析可能性 (analyzability) の喪失が予測され, 基本的な意味の想起, すなわち (28a) における左下の図を想起することなしに動詞 *kick* が使役移動構文に用いられるようになる。

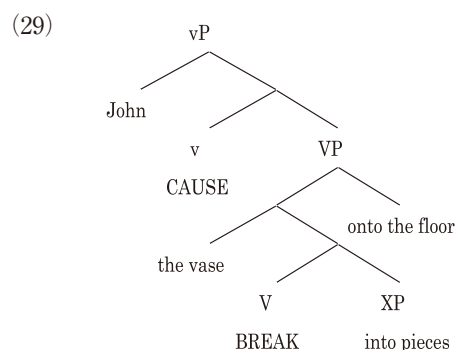
このような過程を Langacker は “skewing” と呼んでいる。つまり, “skewing” とは, 構文のスキーマを通して動詞が新しい意味を獲得する機会を経験し, そのような経験が慣習化されることによって動詞が新しい意味を獲得する過程であると考えられる。例えば, 動詞 *give*, *buy* は2つの補部を取り, 二重目的語構文を形成しているが, 二重目的語構文のスキーマが本来的には2つの補部をとらなかった動詞に対して新しい意味を獲得する機会を与え, その動詞も新たな意味を獲得し, それを慣習化, 定着させていくといった過程であると考えられる。これは事態に対する我々の認知様態が推移していくことを示しており, ある意味, 事態認知の推移 (situational cognitive transition) とも呼べるかもしれない。

5. 経路句における事態認知の推移

ここでは音放出動詞結果構文における経路句を付加詞であるとする安原 (2013) の分析について考察する。また, いくつかの経路句を取り上げ, それらがいかに解釈されるか見ていきたい。

5.1. 経路句の付加詞分析

Yasuhara (2012) では, 語彙項目の概念構造における原因事象と結果事象の使役関係はレキシコンからシンタクスに入力する前にすでに指定されていた。しかし, 安原 (2013) では, 原因事象と結果事象の使役関係が分裂 VP 構造によって解釈され, シンタクスに先行するものでないとする反語彙主義的な立場に立脚している。そして, (29) におけるように原因・手段を表す経路句は分裂 VP 構造において VP 付加詞の位置に存在すると仮定されている。安原によれば, 経路句が V とその補部位置 (XP) にある *break into pieces* よりも高い位置にあることで, 経路句の表す事象がそれらの原因であると解釈される。さらに, (14a) では移動の意味が表されているとし, この移動の意味は動詞ではなく経路句によってた



らされると述べている。実際に音放出動詞結果構文では, 音発生の原因が主語にあるわけではない。主語が経路を移動する際に音が発生している。ここでは音放出動詞結果構文における経路句を付加詞とする安原の分析を付加詞分析と呼ぶことにしたい。

安原は外的原因文の統語的特性をいくつか指摘している。外的原因文と共起する経路句の特性を明確にするため, それらについて見ていこう。

まず, (29) から明らかなように外的原因文と共起する経路句はVP付加詞であるため, 結果句と共起可能であると安原は言う。

(30) a. John broke the vase into pieces onto the floor.

b. John squeezed the rubber ball out of shape into the jar. (= (14))

(29) のように経路句を付加詞と仮定すれば, Vの補部位置に生起する要素 XPとの共起は可能であろう。通常, 動詞句 *break the vase into pieces* においては前置詞句 *into pieces* が結果句である。そのため, (30a) における前置詞句 *onto the floor* は付加詞であると判断されるかもしれない。但し, 動詞句 *break the vase into pieces* を1つのまとまりを持った出来事とみなせば, 前置詞句 *onto the floor* はその出来事の結果であると考えられることも可能ではないだろうか。つまり, 「花瓶が粉々に割れた結果, 床の上に散らばっている」という解釈である。(30b) でも同様に「ゴムボールを変形させてねじ込んだ結果, 瓶の中にある」と解釈することもできる。このような解釈の下では, それらの前置詞句は付加詞と言うより, 構文において必須の項を担っていると思われる。

つまり, (30) が適格と判断されるとすれば, その理由は, 本来結果述語としての役割を担っていた前置詞句 *into pieces*, *out of shape* を動詞や目的語と一まとまりの単位とみなすという事態認知の推移, すなわち Langacker の言う “skewing” によるものであると考えられる。Langacker が主張する “skewing” は1つの拡張の例である。動詞 *kick* の他動詞用法では, ランドマークの移動はプロファイルされず, その移動も想起されないため, 使役移動構文の仕様を十分に満たしてはいない。しかし, その使用が慣習化, 固定化されるに従って使役移動を記号化する慣習的単位として存在が認められるようになる。一方, (30) における “skewing” は拡張ではなく収斂であると考えられるかもしれない。我々の

事態認知は Goldberg (1991) が主張する単一経路制約に従うのが最も自然であるが、我々の事態認知に収まりきらない2つの前置詞句の解釈に折り合いをつけるため、最初の結果述語を動詞句が表す事態へ組み込んでいるという解釈である。つまり、動詞 kick では、蹴られた物の移動が何かを蹴ることのシナリオの一部であることから使役移動構文のスキーマが拡張されたように、(30a)では花瓶を割るシナリオの一部である花瓶が粉々になることと、粉々になった結果、床に散らばるという2つの事態が選択され、この状態が我々の事態認知にそぐわないため、最初の事態を動詞句 break the vase に収斂させるという“skewing”が働いていると考えられる。

安原は経路句の付加詞分析を主張しているが、音放出動詞結果構文における経路句は補部である。安原がこれを付加詞とみなした原因は(30)における経路句を分析したことにある。(30)において安原が経路句と呼んでいるものは、音放出動詞結果構文における経路句と完全に同じ性質を持つとは限らない。

安原は経路句の第2の統語的特性としてそれが義務的でないと述べ、次の例を挙げている。

- (31) a. John broke the vase (onto the floor).
b. John shattered the glass (onto the floor).

(安原 2013: 26)

経路句を付加詞と仮定すれば、省略は可能であろう。例えば、(31a)について安原(2013: 26)は「John が花瓶を床に落として割った」という意味を表し、移動の解釈を保持したまま経路句を省略することができると述べている。しかし、動詞 break の他動詞用法と使役移動用法は別の構文であると考えた方がよいかもしれない。(31)において経路句を省略可能と判断できるのは、“skewing”によって事態認知の推移が起きているからである。Langacker が説明しているように拡張される意味は基本的な意味との関係において文脈の中で決定される。つまり、本来的には(27a)が動詞 kick の基本的意味であったように、(31)でも前置詞句のない構文が表しているのが動詞 break, shatter の基本的意味であり、(27a)から(27c)への“skewing”が起きたように、(31)の前置詞句を伴う構文への事態認知の推移が生じていると考えられる。そのため、我々は前置詞句を伴う構文も伴わない構文も容認することができるのである。

また、経路句を省略して(31a)を解釈する場合、実際に経路句の解釈を保持していると言えるだろうか。床へ落ちたことを花瓶が割れた手段・原因の1つと考えることは可能であるが、経路句が省略されている以上、床へ落ちたという解釈は保持されていないと判断される。John が花瓶を割ったという情報を共有する者同士でさらにその手段・原因について踏み込んでいくという場合はあり得るだろう。しかし、逆に「床に落とした」という情報を共有しながら「John が花瓶を割った」という情報を伝達するといった場面は想定しにくい。そのため、経路句が省略された場合には手段・原因が特定されていないのであり、移動の解釈を保持しているとは考えられ

ない。しかも、このような省略可能性が問題とされる理由は、(30)(31)が音放出動詞結果構文ではないからである。同じ経路句であっても、音放出動詞結果構文の経路句は補部である。一方、(31)における経路句の有無は Langacker の主張する“skewing”から説明されるべきであろう。

最後に安原が指摘する統語的特性は、結果句と付加詞の配置である。安原によれば、(29)において経路句は結果句よりも高いところに位置しているため、線形順序において経路句が結果句に後続しなければならない。

- (32) a. John broke the vase into pieces against the floor.

- b. ?John broke the vase against the floor into pieces. (安原 2013: 27)

付加詞であるとされる経路句が結果句に後続する(32a)は適格であるが、経路句が結果句に先行する(32b)は不適格であると安原は述べている。

ここでも経路句の解釈に関してこれまで考えてきたように2通りの立場が仮定される。実際に(32a)における経路句が付加詞である場合、(32b)のように不適格であると判断されるかもしれない。しかし、(32b)に対する不適格という判断は動詞句 break the vase into pieces の認知的結束性に原因するとみなすことも可能ではないだろうか。つまり、意味的にまとまりを持った動詞句に前置詞句 against the floor を介在させることが(32b)を不適格にするという解釈である。(32a)では全体として結束性を示す動詞句に後続して経路句が付加されており、動詞句の結束性を損なっていない。安原が言うように(32a)では、結果句を含む結果構文に付加詞が付加されていると考えることも可能であろう。但し、(32a)を適格であると判断するのであれば、経路句自体が結果構文の結果句を形成しているとする事態認知の推意に基づいた解釈も可能ではないだろうか。そして、この解釈は(32a)から前置詞句 into pieces を削除した文が結果構文として適格であることから支持される。

以上のように音放出動詞結果構文の経路句は補部として確立されているが、それ以外の文では拡張される意味が基本的な意味との関係において文脈の中で決定されるため、事態認知の推移によって経路句を伴う構文も伴わない構文も容認される。

5.2. 経路句の述語機能

最後に影山(2006)が提唱する音放出動詞の2つの語彙概念構造について見ておきたい。

影山によれば、経路句は(33)におけるように有界的であってもよいし、(34)におけるように非有界的であってもよい。⁸⁾

- (33) a. Tap water splashed into a basin.
b. The car shrieked away from the curb, hitting the mirror of a parked van. (影山 2006: 63)

- (34) a. The water hissed between the cliffs like a stream of liquid brown mud.

b. Soon, an armored brigade...rumbled forward
toward the road junction. (影山 2006: 64)

本来、静止した状態の主語が音を出すという事態であったものが、経路句を加えることによって移動を表すようになる理由として、影山は音を「移動に密接に付随する様態」と仮定し、これを語彙概念構造へ組み込むことによって主語の移動を説明している。⁹⁾ (33) (34) のように経路句には有界的なものと非有界的なものがあるが、それぞれに対して (35) (36) の語彙概念構造を提案している。

(35) The key clattered to the floor.

[x BECOME <Manner: [BECOME [[CLATTER] BE NOT-AT-x]] > [x BE AT-z]]

(x = the key, z = the floor)

(影山 2006: 65)

(36) The truck rumbled down the road.

[x MOVE <Manner: [BECOME [[RUMBLE] BE NOT-AT-x]] > [Path DOWN-z]]

(x = the truck, z = the road)

(Ibid.)

影山によれば、(35) では音を放出するという事態が BECOME の様態として付け加えられ、「x が音を放出しながら z に存在することになる」といった事態が表されている。一方、(36) では x が音を放出するという事態が MOVE の様態として付け加えられ、「x が音を放出しながら z という経路を進んでいく」という意味が表されている。

このように経路句を伴う音放出動詞の語彙概念構造を仮定すれば、当然のことながら経路句を単なる付加詞と考えることはできない。有界的経路句を伴う音放出動詞は語彙概念構造に関数 BECOME をとり、非有界的経路を伴う音放出動詞は関数 MOVE をとり、それぞれが放出する音を移動様態として語彙概念構造に組み込んでいく。つまり、音放出動詞結果構文の経路句は付加詞ではなく、補部と考えられる。

さらに、これらの構文では前置詞と小辞 (away, off, down, along など) が義務的に生じ、距離を表す句があるだけでは Folli and Harley (2008: 192) や影山 (2006: 66) が指摘するように移動の意味を表すことができない。¹⁰⁾

(37) a. At impact, his gun clattered several feet
* (away from him).

b. Within seconds the rocket roared several miles * (skyward). (影山 2006: 66)

(37) において経路句が省略できないことは、これらが単なる付加詞でないことを示している。¹¹⁾

6. おわりに

本稿では、音放出動詞結果構文における経路句を付加詞であるとする安原 (2013) の分析に対し、経路句はこの構文にとって不可欠な補部であることを示した。さらに、我々が経路句を解釈する際には、事態認知の推意によって基本的な意味との関係において拡張される意味が文脈の中で決定されており、音放出動詞結果構文以外では経路句を伴う構文もそうでない構文も容認可能である

ことにより省略可能性が生じることを述べた。事態認知の推移としての “skewing” は構文が確立される過程のみでなく、事態認知・事態把握のレベルでも生じていると考えられる。

また、音放出動詞結果構文における経路句が移動の原因・手段とみなされる理由について湯本 (2011) に従って「結果構文における音放出動詞の認知メカニズム」を提案し、いかに「音放出」が「移動」と結びつくか示した。

注

1) 影山 (2006) は、見かけ上の目的語をとるという現象が音放出動詞の非能格仮説を支持しない理由について述べている。影山・由本 (1997) では、way 構文を2種類に分類し、(ia) における動詞句 inch one's way は移動の様態を表しており、この動詞は名詞句 one's way を省略することのできる非対格動詞であると述べている。(ib) についても同様である。

(i) a. Alice Slade inched her way apologetically into the room.

b. as a bullet zips its way through their bodies

(影山・由本 1997: 177)

これらは「移動推進動作」を表す動詞句 push one's way のような非能格・他動詞を用いた way 構文とは区別される。

さらに、Levin and Rappaport Hovav が非能格動詞であるとして提示している次の例でも名詞句 one's way が省略可能であると影山は指摘している。

(ii) Then he watched as it gurgled its way into a whiskey tumbler.

(Levin and Rappaport Hovav 1996: 493)

影山によれば、(ii) の名詞句 its way を省略して It gurgled into a whiskey tumbler. としても問題ない。そのため、この例における動詞 gurgle は非対格動詞と分類される。

また、Levin and Rappaport Hovav が音放出動詞を非能格とする理由に、名詞 way 以外の目的語をとることがあげられる。

(iii) ...the bell above her head had jangled its first summons.

(Levin and Rappaport Hovav 1996: 492)

影山は、機械や時計などは人間に何かを知らせるという機能を本来的に持つため、外項として扱われるという点は認めつつ、機械仕掛けが関係しない場合には目的語は

認められないとして、次の例を提示する。

- (iv) *The keys in her pocket jangled the summons.
(影山 2006: 61)

結果的に (iv) における動詞 *jangle* は非対格動詞と分析される。

2) 影山は、音放出動詞が非対格動詞であることを支持する例として場所格倒置構文も提示している。

- (i) Behind them rumbled an impressive line of Russian BTR-60 PK armoured personnel-carriers, huge, boat-shaped amphibious ones.
(影山 2006: 61)

3) これは単一経路制約 (unique path constraint) として知られている。

- (i) a. *Sam kicked Bill black and blue out of the room.
b. *Sam kicked Bill out of the room black and blue.
(Goldberg 1991: 368)

4) 但し、音放出動詞結果構文に含まれる音放出動詞を非対格とする影山 (2006) の分析からは異論のあるところである。さらに湯本は、意味的結束性の原則の前半部分で構文下位イベントと動詞下位イベントの主語がともに Agent であると仮定されるなら、(16a) の主語 *the trolley* を有生物として扱っていることになる点を指摘している。これは以下の (24) において Goldberg and Jackendoff が主語 *the elevator* を有生物とみなせないと述べていることに矛盾している。

5) 電話を有生物とみなすメタファーが存在することを示す例として Goldberg and Jackendoff は次の例をあげている。

- (i) If the telephone rang, it could ring itself silly.
(Goldberg and Jackendoff 2004: 547)

ここでは電話を有生物として解釈させるメタファーが存在しており、電話が鳴っている様子が電話自体を馬鹿であるかのように見せていると解釈される。この事態は百科事典的知識とも一致する。

しかし、この主張に関しても湯本はエレベーターを有生物とするメタファーが必ずしも存在しないわけではないと述べ、次の例をあげている。

- (ii) His elevator doesn't go all the way to the top (floor).
(湯本 2011: 38)

(ii) は「あいつはおつむが弱い (少しいかれている)」と解釈されるが、この例はエレベーターを人間の頭脳に例えていると湯本は述べている。

6) Langacker (2009: 251) によれば、使役移動構文 (27c) は非常になじみのあるものであり、あえて言えば構文によってその意味が与えられたとは考えられない。また、(27a) が動詞 *kick* の基本的な意味であると仮定しつつも、(27c) の意味やその他の意味も確立していると述べている。

7) 第3の統語的特性としてこれらの経路句が付加詞であるため、経路句を残して動詞句を削除することができない点を安原は指摘している。

- (i) a. *John broke the vase against the wall, and Mary did against the floor, too.

- b. *John broke the vase onto the floor, and Mary did onto the floor, too.
(安原 2013: 27)

例の後半部分で動詞句が削除され、不適切となっているが、これは経路句が実際に付加詞である場合もあることを示している。つまり、“skewing”の初期段階にあると考えられる。

8) 影山は非有界の経路と有界の経路を組み合わせることも可能であると述べ、次の例を提示している。

- (i) Once we climbed onto the bus, we put our fare into a box where it jangled down into the bottom.
(影山 2006: 64)

この例では非有界の経路と有界の経路がともに含まれているが、主語のたどる経路全体としては有界的であると考えられる。

9) 音が移動の必然的な付随物である場合もあれば、影山が次の例において指摘するように必然的とは言えない場合もある。

- (i) a. A man and his sons jangled past on four camels with bells at their knees.
b. Ma Bombie wheezed up the hill towards them.
(影山 2006: 64)

これらの例は音放出動詞結果構文と同じ形態をとっているが、経路句は付加詞と考えられる。

10) 移動動詞は本来的に主語の移動を意味として有している。

- (i) He walked two miles.
(影山 2006: 66)

(i) には (37) のように経路を付け加える必要がない。影山によれば、(37) の例における「主語が移動する」という内容は文脈からの語用論的推論ではなく「言語としての意味」である。主語の移動が語用論的推論であれば、経路句がない場合でも距離を表す句から移動が推論されるからである。影山は (i) における距離尺度句を純然たる付加詞である、つまり省略可能であると述べ、(37) の移動の意味は経路を表す前置詞句と小辞によって提供されることが合理的であると説明している。

11) 影山 (2006: 67) は *She swam to the island*. における前置詞 *to* が、動詞 *swim* によって表される継続的移動と島にいるという状態を結びつける「推移 (transition)」の働きをしていると述べている。Talmy (2000) が *satellite-framed languages* と呼んだものの中に英語が含まれていることにふれ、英語などでは経路を表す小辞、前置詞句が推移の意味を表し、*satellite* が述語としての機能を持つと述べている。つまり、*satellite-framed language* である英語では有界の経路は BECOME という変化の概念を、非有界の経路は MOVE という継続的移動の概念を語彙概念構造に含んでいると考えられる。Kageyama (2003) は、前置詞 *to* の語彙概念構造を次のように仮定している。

- (i) *to* Y: BECOME AT-Y
(影山 2003: 357)

これは *satellite* としての前置詞句・小辞が経路句として

現れ、文中で不可欠な補部として機能していることを十分に支持する分析である。

参考文献

- Folli, Raffaella and Heidi Harley. 2005. "Flavours of v: Consuming Results in Italian and English," Roumyana Slabakova and Paula Kempchinsky (eds.) *Aspectual Enquiries*, 95-120. Dordrecht: Springer.
- Folli, Raffaella and Heidi Harley. 2006. "On the Licensing of Causatives of Directed Motion: Waltzing Matilda All Over," *Studia Linguistica* 60, 121-155.
- Folli, Raffaella and Heidi Harley. 2008. "Teleology and Animacy in External Arguments," *Lingua* 118, 190-202.
- Goldberg, Adele E. 1991. "It Can't Go Down the Chimney Up: Path and the English Resultative," *BLS* 17, 368-378.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff. 2004. "The English Resultative as a Family of Constructions," *Language* 80, 532-568.
- Kageyama, Taro. 2003. "Why English Motion Verbs Are Special?" *Korean Journal of English Language and Linguistics* 3/3, 341-373.
- 影山太郎. 2006. 「音放出動詞を伴う移動構文と結果構文」『英米文学』50 (2), 57-73.
- 影山太郎・由本陽子. 1997. 『語形成と概念構造』東京: 研究社.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2005. "Construction Grammars: Cognitive, Radical and Less So," Francisco J. Ruiz de Mondoza Ibánñez and M. Sandra Penā Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, 101-159. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2009. "Constructions and Constructional Meaning," Vyvyan Evans and Stéphanie Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*, 225-267. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1991. "Wiping the Slate Clean: A Lexical Semantic Exploration," *Cognition* 41, 123-152.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1996. "Lexical Semantics and Syntactic Structure," Shalom Lappin (eds.) *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, 487-507. Oxford: Blackwell.
- Lupsa, Daniela. 2003. "The Unergativity of Verbs of Motion," *Proceedings of the 57th Conference of the Tohoku English Literary Society*, 38-45.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2001. "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-797.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. 2 vols. Cambridge, MA: MIT Press.
- Yasuhara, Masaki. 2012. "An Event-Based Account of the Unique Path Constraint Effect," *Tampa Papers in Linguistics* 3, 129-139.
- 安原正貴. 2013. 「音放出動詞と共起する経路句の事象依存分析」『英文学研究』90, 19-35.
- 湯本久美子. 2011. 「Sound-Emission Path Resultative の "Skewing" —動詞最小主義と動詞最大主義の間を繋ぐメトニミー—」『青山学院女子短期大学紀要』65, 31-54.